

極楽寺だより



2019(令和元)年6月号

発行所：極楽寺（浄土真宗本願寺派）☎ 759-3803 山口県長門市三隅下野波瀬 3633 ☎ 0837-43-0625

夏法座のご案内

雨の季節には、仏さまの教えを聞き、

静かにわが身をふりかえる「安居会」

「夏安居」という行事が、お釈迦さま

の頃から伝わっています。

田植時期の疲れを、お法の水で流そうという、ゆ

かしい夏の法座です。お誘いあわせ、お参り下さい。

六月十三日（木）

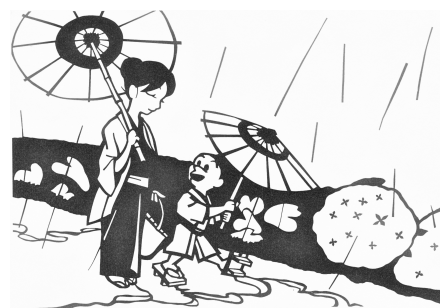
昼一時半 夜七時半

六月十四日（金）

昼一時半

講師 山口市蓮光寺住職

岡本達美 師



ご予約ください

第56回三隅地区親鸞聖人鑽仰会法座

期日：9月27～28日 会場：津雲 寶國寺

講師：外松太恵子 師

※お寺で送迎致します。遠慮なくお申し出下さい。

「平成」という時代



「平成」が終わり、五月から新たに令和
という時代が始まりました。それに伴い、

メディアでは「平成」という時代を振り返る特集が数多くあ
りました。皆さんにとつて、「平成」とはどんな時代だった
のでしょうか。それぞれの立場によつて見方は様々でしょ
うが、私には「バブル景気の後始末」の時代だったのでは
ないかと思うのです。バブルが生んだ不良債権処理に追わ
れ、「失われた20年」と呼ばれる景気低迷期が訪れます。就
職氷河期を迎え、非正規雇用労働者が誕生。格差は広がり新
たな貧困層を生み出しました。次の世代に、大きな負担を強
いてしまったのです。



「バブル景気」とは、後から振り
返つて名づけられた言葉ではあり
ません。リアルタイムで呼ばれてい
たものでした。「実質以上に膨らん
だ、中身の泡（バブル）の

ような経済状況」だということも、いつか弾けるものだとい
う認識も、みんなが持っていたのです。にもかかわらず、「ま
だ、大丈夫だろう」と浮かれていた。考えてみれば、怖ろし
いことだと思えます。

薬師寺元管主の高田好胤師は、日本の高度経済成長長期に「物
で栄えて心で滅びぬために」という言葉を残されましたが、
本願寺の大谷光真前御門主は、バブルを振り返り「心が滅び
たから物が栄えたのではないか」と
言われています。なるほど、そう
なのかもしれません。



大谷光真 前門様

思想家の内田樹先生は、当時大学
の助手で、バブルとは無縁の生活をしておられました。そん
なある日、高校のクラス会に出席すると「内田は株やらない
のか？」と聞かれたので、「お金は額に汗して稼ぐもんだろ」と
答えると、みんなに大笑いされたそうです。「バカだよ、
こいつは。金が地面に落ちているのに拾わないっていうん

だから」と。(『昭和のエートス』内田樹)

目の前のお金を拾い集めることばかりに夢中で、それを手にするまでの経緯や態度、人生に対する向き合い方を捨ててしまった。中身を見失い、人間の生き方が泡のようになってしまった。まさに、あの時代を象徴するようなエピソードです。

そう考えると、やはり「バブル景気」は心を滅ぼすことで生まれたものだという指摘には、うなずかざるを得ません。「平成」に入ると、この状況はさらに深刻になりました。グローバル化が進み、経済至上主義、市場原理主義が世界的に広がったことで、スピード化、効率化、合理化が進み、人の心はますます取り残されています。

お金は、人がより良く生きるための手段であつたはず。それが過剰に目的化したことで、お金のために人の心も、いや人生さえも、簡単に踏みじられる時代になつたといえるでしょう。



農業に従事し、農民の立場から見えてきたものを、小説

ヤルポルタージュ等で発表される農民作家・山下惣一さんが、昭和62年に西日本新聞で連載されたコラムに、こんな話がありました。ちょうど、バブルが始まった頃に書かれた文章です。

山下さんには、とても実直な友人がおられます。彼は貧農の六男に生まれ、定時制高校を出て、地元では大手の鉄工所に就職して三十余年。



家から職場までの海沿いの道を、さながら機械のごとく通勤していました。酒もタバコもギャンブルも、女性にまで関心がなく仕事一筋。「あいつは何のたのしみがあつて生きているのだろうか」とみんなが噂するような人でした。

当時、電電公社が民営化され、NTTとなることが発表されました。みんなが「これは、確実に儲かる」とNTT株を求めたので、購入のための抽選券が配られることになりました。鉄工所の同僚が、面白半分に仲間に配った抽選券の一枚。何と、山下さんの友人がもらった券が、当たりだったのです。「どうしよう」と相談された山下さんは、「せっかく当たつたんだから、買えばいいじゃないか」と答えます。彼は不安

を抱えながら、清水の舞台から飛び降りたつもりで約百二十万円を支払い、一株購入しました。二晩枕の下に敷いて寝ましたが、持ち慣れない上に怖くなり、三日目には売りました。すると、約百八十万円で売れたのです。二日間で、六十万円の利益になったというわけです。

山下さんは彼に呼び出されました。ところが、彼は妙に沈み込んでいます。

「よかつたなあ。けつこうけつこう」

「冗談いな。人を馬鹿にするな」

「どうしたとか？」

「考えてみる。六十万円はオレの三

カ月の給料だぞ。それが紙切れ一枚でたったの二日ですに入る。こんなことがあつてよかとか。それじゃ、オレ

は何のために毎日弁当持って会社へ通っているんだ。もし、十株も持っていたら、一年間働かなくてもいい計算になる。オレたちの一年分の労働はそれくらいの価値しかなかとか？／何か知らんがアホらしくなってきた」

彼は職場の同僚にも奥さんにも内緒で、その六十万円



を定期貯金にした。このカネには死んでも手をつけないという。(『身土不二の探究』山下惣一)

私はこの話を読んで、「な、なんてカッコ良い人なんだ！」と衝撃を受けました。一昔前には、自分の仕事や生き様に、プライドを持って生きた人がいたのですね。それは、確かな手応えのある誇りです。中身の無い、泡のようなものではありません。

ところが今や、古いも若きも「濡れ手に粟」の稼ぎ方を求めています。それどころか、誠実な生き方の人を敬うこともせず、馬鹿にさえしている。その上、利用してこき使つてやろうとするブラック企業の経営者がいるような時代です。

山下さんは、こんな友人の話も書いておられます。

もうひとりの友人はダイヤモンド類のセールスをしている兼業農家。彼は豆粒ほどの一個百万円単位の商品を持ち歩いているのだが、ときどき自分にこう言い聞かせる。

「この指輪一個が百万円。家の田んぼ一反歩が百万円。」

この百万円は絶対に同じではない。そんなことがあるはずがない、あつてはならない」

ときどきそれをやらないと気が変になりそうだと彼はいう。田植えの時期、泥田に入つて耕うん機で耕しながら呪文のように口の中でそれをくりかえす。そうしないと、とてもコメなんか作れないのだそうである。(同)

金がすべてという時代に、何とかして抗おうとする姿、心を滅ぼさぬようにと生きる人の姿に、涙がこぼれそうです。こんな人たちがいたことを、私たちは知らなくてはならないのではないのでしょうか。そんな人たちの生き様が、敬われる時代にならなくては、「バブルの後始末」は終わりそうにありません。



「平成」といえば、多くの災害も起こりました。代表的なものとして東日本大震災が思い起こされることでしょう。あの大地震が起きて一か月後、あるお寺で「これから私たちに何ができるだろうか」という話し合いが行われました。多

くの方が参加され、中には初めてお寺に来るといふ人もいたので、自己紹介の場をもちました。

その時、三十代の男性がこんな話をされたそうです。

阪神淡路大震災があつた年、インドを旅行していると、現地の人から

「あなたの宗教は何ですか」と質問されました。彼が「ありません」と答えると、「ウソだ」と言われたの

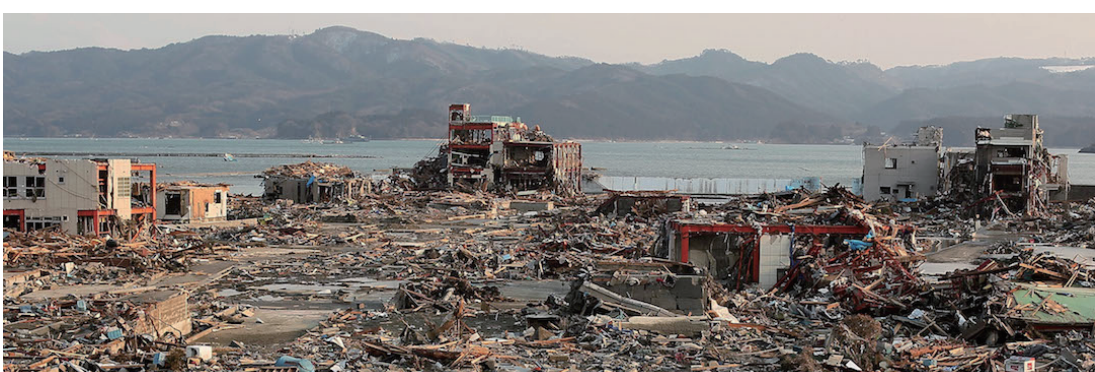
です。ウソをついているつもりはないので、再び「ありません」と答

えると、「日本人の宗教はお金だろう？」と言われたというのです。彼は頭が真っ白になつてどう答えて

いかわからなくて、その後もずっと気になり、日本に帰つてきてから

は自分の生き方を考えたといひます。今は、農業を生業とし、身の丈

にあつた生活ができればいいと



思っている。そして、「地震は人間の手ではどうすることもできないけれど、原発を必要としてきた生活をどうしたらいいのか、みんなと話したくて参加しました」と。(ラジオ放送『東本願寺の時間』藤場 芳子「3.11から思うこと」)

「平成」という時代は終わりましたが、これまで失ってきたものを、私たちはまだ取り返してはいないのでしよう。大震災後は、「絆」という言葉が叫ばれ、助け合うことの尊さに気づかされたはずなのに、気がつけば「金がなければ、金がかかる者は、生きる資格がない」という声さえ聞かえてくるようになりました。

「令和」という元号は、万葉集が出典とされ、「美しい、素晴らしい」という意味の「令」と、「おだやかな、争いのない」という意味の「和」を合わせて名づけられたものだと言われています。では、美しい生き方とは、どんなものなのか。経済的な繁栄だけが素晴らしいのか。今が楽しければ、それが和やかということなのか。この機会に、考える必要があるのではないのでしょうか。■



お念珠、修理いたします

お念珠の紐は、切れるもの。特に、不吉なことではありません。
お寺まで、お持ち下さい。修理いたします。



仏事、葬儀、納骨・・・、わからないこと、困ったことがあれば、
極楽寺にご相談下さい。どうぞ、ご遠慮なく

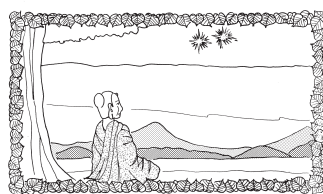
0837 (43) 0625



極楽寺ホームページ

極楽寺.com で検索を

極楽寺だよりの過去の記事をはじめ、
盛りだくさんの内容です。



極楽寺掲示伝道 けいじでんどう



6月の言葉

「嫌な雨だなあ」「よりによって、今日降らなくても…」

楽しみにしていたイベント。子どもや孫の運動会。ついつい、愚痴を漏らしてしまうことは、誰しもあるものです。それを、頭ごなしに否定するつもりはありません。しかし、それはあくまでも自分の都合によるものであり、自分から見ただけのしかいことを、忘れてはいけないと思うのです。長く続いた晴天を恨めしく思っていた農家の方がいるならば、その人にとっては恵みの雨なのですから。

逆に、私にとって嬉しいことも、違う立場の人にとっては悪いこともあります。「台風がそれてくれて、良かった」と胸をなでおろしても、それが台風が直撃したところには、悲しむ人がいるのです。

私にとっての「良い」は、誰かの「悪い」かもしれない。つまり、「良い」「悪い」ということは、置かれている立場によって、変わるものだといえるでしょう。固定化された「良い」「悪い」というものはないのです。

そう考えると、私の人生に起こる様々な「良い」出来事も「悪い」出来事も、その場、その立場で感じることでしかありません。長い目で見れば、本当に「良い」ことなのか「悪い」ことなのは、わからないのではないのでしょうか。

400 mハードルの名選手・為末大さんは、エドモントン(2001年)、ヘルシンキ(2005年)の二つの世界陸上で銅メダルを獲得しました。しかしその栄光は、シドニーオリンピック(2000年)での転倒、いきなりの予選敗退があったからこそだと言われています。



悪天候のときに何が起るのか、若いアスリートの特徴は何か、どんなときに精神は乱れるのか…。選手心理や環境が悪いときの状況を把握できるようになった。

また、これ以降、僕は世界で転戦する道

を選んだ。シドニーの経験を生かされたことで、僕はメダルを取れたのだ。

シドニーは確かに失敗だった。しかし、

あれは本当の意味で失敗だったのか、／何が失敗で、何が成功なのか、実は長い

人生においては、分からないのではないか／後に僕は、明らかかな失敗というものは実はない、と確信するに至る。／実際には、その後の過ごし方でいくらでもそうではないものに変わっていくのである。

本当の失敗や敗北とは、転倒したという結果ではない。転倒したまま起き上がらないこと。僕はそう思うようになって。／だから僕が意識するようになったのは、一つ一つの結果に執着しないことだった。一つ一つの失敗や成功の意味を決めつけ過ぎない。あの時は、あれでしかなかった、と考える。ああいうものだったのだ、と理解する。／

仮に今、失敗を感じていたり、あるいは将来、敗北を実感したりすることになったとしても、そのことで自分を全否定してはいけない。むしろ失敗を肯定し、失敗して良かった



と思えることを一つでも見つけるようにすることが大事だ。

それができるかどうかが人生を分ける。なぜなら、人は負けないわけにはいかないから。勝ち続ける人生なんて、あり得ないからである。『負けを生かす技術』為末大

「ものは考えよう」と言われます。物事は考え方しだいで、良くも悪くも受け取ることができるとい意味です。しかしそれは、自分の都合の良いように受け止めるということではないのでしよう。そうであれば、どこまでも自分の都合という枠組みからは逃れられませんし、枠組みの外にあるものは、気づくことができなくなります。

実は、仏教で問題にするのは、「自分の都合」なのです。為末さんの結果に対する向き合い方は、まさに仏教的なアプローチだと、私は感じました。

こんなお話があります。一人の修行僧が、ある禅師を訪ね、教えを乞いました。禅師は修行僧に茶をすすめながら、しばらく話をされました。ところが突然話を止め、いっばいお茶の入った茶碗にさらにお茶を注ぐとされたのです。修行

僧は驚き「禪師さま、こぼれます！」と言うと、禪師は「そのお茶を飲みほせ！」と大喝一声だいかついつせいされたのです。

「カラにせねば新しいお茶が入らないように、お前の頭の中に、お前の考えがいつぱいつまっているから、わしの話などみなこぼれおちてしまう。そして、自分の都合のいいところだけを、それもゆがんでしか聞けない。頭をからっぽにしなければ、話を聞くことができないのだ」と。

正と邪しやうじやう、清浄と汚れけが、美と醜しゆうという、損と得という、自と他という、愛と憎しみという：モノサシが入って来たら、そのモノサシにかなうものだけはいれることができるが、かなわないものははみ出してしまふ。

人間の寸法すんぽうから見れば、都合の悪い毒蛇どくじやや害虫どくぐさや毒草も、ひとしく安住あんじゆうの地が与えられているのは、この天地にモノサシがないからである。善という寸法、清浄という寸法さえない。それがほんとうの善であり、清浄なのであろう。→



私という思いが、私の好み、私の都合という寸法が入るから、その思いにかなわないとき、好みや都合に合わないとき、それらは皆はみ出してしまふ。（『一度きりの人生だから』青山俊董）

自分の都合というモノサシで計ると、見えなくなるものがあるのです。自分の思いが強いほど、大切な教えも聞こえなくなる。それが自分を狭め、苦しめることにもつながるのです。

だからこそ、自分の都合を点検てんけんしてみる。その場だけで、物事を決めつけない。仏教は、そんな態度たいどが開く世界を、指示しめしてくださっています。世界はもつと深く、豊かなのだというこを。 ■



第 37 回 児童念仏奉仕団のご案内

大津東組（長門・三隅地区の浄土真宗寺院）では、夏休みを利用して小学三年生から中学一年生を対象に、ご本山参りを企画しております。是非、ご参加のお呼びかけをお願いします。



- ◆ 期 日 2019(令和元)年7月29日(月)～31日(水) 二泊三日
本願寺参拝 大阪ユニバーサルスタジオジャパン
- ◆ 対 象 小学三年生～中学一年生
- ◆ 参加費 41,000 円 (中学生は、43,000 円)
- ◆ 申込み 6月30日までに極楽寺へ ※ 詳細は、お寺へおたずねください。



お知らせ

浅田・沢江・上ゲ・殿村の世話人・大田忠男さんがご往生されました。長い間お世話いただき、ありがとうございました。

住職からの
お願いです

引き続き、今回も・・・

夜の法座に、お参りください



□ 三隅地区の聖跡巡拝団で、大阪に行ってきました！実は、大阪は本願寺の門前町が始まりなのです。□ 1496（明応5）年に本願寺第八代蓮如上人が、今の大阪城付近に坊舎を建てられました。蓮如上人は、寂さびとしていた本願寺を全国的なものにされた方で、多くの人びとに慕われていました。上人の元には多くの門徒が集まり、寺内町を形成したことが大阪発展の礎となったのです。□ その後、本願寺が大阪へ移転します。石山本願寺と呼ばれ、町は益々栄えたのですが、そこに織田信長が攻め込んできました。十一年にもわたる石山合戦の後、本願寺は和歌山へ退去することになります。この跡地に豊臣秀吉が建てたのが大阪城なのです。その後本願寺は、貝塚を経て大阪・天満に移り、秀吉に寄進された現在の京都の地に移ります。ちなみに、天満の本願寺があった地には、現在、桜の通り抜けで有名な造幣局が建てられています。皆さん、テレビで大阪城や造幣局の桜の通り抜けを見たら、「ここには昔、本願寺があったんだ」と思い出してくださいね。□ 巡拝団では、なんばグランド花月で吉本新喜劇も見ました。元々、落語や講談はお寺のお説教から生まれたものですから、大阪が笑いの本場なのも、もしかすると本願寺の影響があるのかもしれません。□ 今回の旅行は、参加者が少なく寂しかったのですが、温かく、盛り上がった旅行になりました。近頃は、融通が効き、割安の個人旅行が中心ですが、色んな人と出遇い、支え合いながら、助け合いながら旅するのも、楽しいものです。二年に一度の巡拝団、ぜひご参加ください。（住）



なんばグランド花月にて